

＜書評論文＞

交錯する「女性」

——レイス／エスニシティとジェンダー——

Mary Maynard and June Purvis(eds) ,
*New Frontiers in Women's Studies:
 Knowledge, Identity and Nationalism.*
 (Taylor&Francis, 1996)

菊 地 夏 野

はじめに ——本書の背景

フェミニズムの思想が生まれて以来、知のジェンダー・バイアスは問われ、「学」内部の権力関係が浮き彫りにされてきた。ひとつの抵抗の声は他のマイノリティの抵抗を呼び起こすことが可能だが、声が思想となり、制度化された途端に抵抗の思想は既存の共同体に回収される危険とともにある。制度化されることの危険にどう対峙できるかが問われるのだ。

日本のフェミニズムもそのような道を辿ってきた。歴史学において女性史という成果を蓄積しながらも、「女性学」という名の学問が誕生したのは70年代である。確かに、「女性」というアイデンティティを制度の中で名乗ることだけで意味をもつ時はあったのだろう。しかし、現在の女性学の位置は、そのようなある種の楽観を許すものではない。「女性」というアイデンティティはもはや単に解放への開かれた経路を指し示すものではないのだ。

本書は、イギリスのポーツマスで1994年に行なわれたWomen's Studiesの国際的シンポジウムでの発表をもとにした論文集である。シンポ参加者は、英米独などのヨーロッパ、オーストラリア、米国で活動している社会学、歴史学、文学など様々な分野の研究者、活動家という多彩な顔ぶれである。

序章で、メイナードとバーヴィスは、シンボの目的はWomen's Studiesがもっている西洋白人女性のエスノセントリズム（自民族中心主義）に挑戦し、その境界を広げることにあったとしている。2人によれば70年代に西洋の高等教育に導入されたときのWomen's Studiesのねらいは、女性が知の創造と分配から排除され、不可視の存在にされていた状況を変えていくことであった。2人は西洋のWomen's Studiesのプロセスを3つの段階に分ける。第1の時期は「回復」で、消されてきた女性の足跡を獲得するために、概念や理論、具体的な調査、説明枠組みを作り出してゆく中で女性の指導力を発展させてゆく。第2の時期は「再構築」。現存の学問的方法論を再評価し、編成し直してゆく。例えば「労働」「余暇」「階級」「家庭」などの語は異なった意味、異なった領域をもつようになり、また新たに「セクシュアリティ」「性暴力」「女性」「出産」などが広く議論されるようになる。70年代半ば以降、広範にわたる学問分野で、この2つの段階が経験されてきた。第3の段階は「reflexivity 自省——自覚と自己批判——」である。家父長制の本質、ジェンダーによる不平等と他の形の支配・搾取との関係、女性の経験における文化的／物質的要素の相互作用など緻密な議論が続けられる。またメインストリームのフェミニスト達——ヘテロセクシュアルの西洋白人中産階級——の関心からの、黒人女性、有色女性、「第3世界」の女性たちの排除が批判される。現在のWomen's Studiesはこの段階にあるのだ。

以上の問題意識の下にこの本は編まれている。第1部「On the Move: Women's Studiesの新しい課題」は、Women's Studiesが生み出す知の形式と内容に焦点を当てている。とくにレイスやエスニシティの観点からWomen's Studiesの前提や基盤の問い直しが行われる。第2部「Women in Movement: アイデンティティ、移住、ナショナリズム」では、ナショナリティ、植民地主義、主体などの事柄について具体的な素材をもとに考察される。それらに関する多くの分析が、女性の存在の無視やその経験を男性のそれと変わりのないものとするなどジェンダーに盲目的なやりかたで進められるのに対して、ここではとくに「移動する女性」の観点から「ホーム」「コミュニティ」「自己／所属意識」等の観念が分析される。今回は本書の主眼をなす2つのテーマ、「Women's Studiesの問い直し、再編成」と「移動する女性／ディアスポラ」に沿って書評したい。

1. Women's Studiesとレイシズム

Women's Studiesはセクシズムのなかで分断されている女性の一体性への楽観的期待をもっていた。もちろん、アメリカの女性解放運動は公民権運動との強い連関のなかに生まれ、黒人女性の力なしには成立しえなかった。しかし、「学」として制度化していくプロセスにおいて、あるいは「女性」という言語編成そのものがもつ抑圧性のゆえに、「女性の共同性」という言葉は達成されるべき課題ではなく、自明の前提に変わってしまった。

第1章のメイナードは、現在Women's Studiesが直面している、この前提への異義申し立ての過程を整理している。告発は、イギリスやアメリカ合衆国の黒人女性に始まり、その他の「第3世界」出身の女性に広がった。その批判は、レイシズム（人種主義）とエスノセントリズムの2層に区別される。レイシズムとは、あるエスニックグループが本来的に劣っているという根拠によりその権利を奪うことをさす。初期のWomen's Studiesは、白人女性の経験に関心を集中させ、有色女性を実質上排除した。そのような抹消は、人種的特権を支える権力関係の存在に基づいている。Women's Studiesのレイシズムは、ある沈黙や欠落、省略のなかに逆説的に見出だされる。一方、エスノセントリズムは自文化の価値を自明視し他の文化を一方的基準から評価する態度をいう。Women's Studiesは、自文化の中に住む非白人女性だけでなく、異なる地域に住む女性をも無視してきた。開発研究は未だ周縁に止まっているし、世界中の女性の多くはWomen's Studiesのカリキュラムの関心からはずっと遠いところで生活している。

このような基本的認識の上で、Women's Studiesのレイシズムへの取り組みについて検討される。初期のWomen's Studiesはレイスを、単に非白人女性が女性として経験する不平等や抑圧の程度を強めるものとしてのみ扱ってきた。しかし、ジェンダーが単に階級に付加されるものではないように、レイスを既存のジェンダー分析に付加するのは誤っている。レイスは被支配の経験の性格を質的に変えるのである。黒人女性の抑圧の経験は白人女性のそれとは質的に違う。現在のWomen's Studiesは付加的アプローチを乗り越え、レイシズムに関して黒人女性によるものも含めた多くの分析を進めている。しかしメイナードは、そのレイスへの取り組みはいまだレトリックに止まっており、中心のアジェンダに影響を及ぼすには至っていないと評価する。

第1の問題として「difference 差異」の概念の使用を取り上げる。フェミニズムが「差異」を重視するようになったことで、暗黙の二元論は捉え返され、「黒人」「女性」等のアイデンティティはポジティブな意味を得た。しかし「差異」の概念の安易な使用は「差異」の中に含まれる権力性を抜き去ってそれぞれのアイデンティティを同列に並べることに終始したり、「差異」を関係の中で捉えるのではなく、特異な集団にのみ当てはまる徴候としてしまうなどの危険をはらんでいる。第2の問題は、その多文化主義的アプローチである。多文化主義は、マイノリティの自然な同化によるレイシズムの解消を論じたそれまでのリベラリズムに代わって60年代に出現したもので、マイノリティグループは自文化を保持したままでマジョリティグループの寛容によって共存できると考える。しかしそこでは「寛容」のもつ抑圧性は見過ごされている。第3の問題は、フェミニストの間で近年浸透している文化相対主義的傾向である。しかし、文化相対主義的フェミニズムは他の文化の男性支配を容認してしまうことがある。その結果、西洋の女性と第3世界の女性の溝が大きくなってしまう。第4の問題は、西洋フェミニズムの文化帝国主義である。西洋フェミニズムの世界的ヘゲモニーは英語帝国主義に支えられている。ほとんどのフェミニストの国際会議が英語を公用語としており、他言語から英語

に翻訳されるときも政治学が働いてしまう。フェミニズムの言説の多くが、「自由意思」や「自己決定」、「個人主義」など西洋的発想に基づいているが、これらの価値が全ての女性にとって優先されるとは言えない。

「文化」という枠組みから脱構築的に分析していくメイナードに対して、第2章のドゥ・グルートは視線の構図を問題にする。ドゥ・グルートによればWomen's Studiesにおける非白人女性の沈黙は、彼女たちの不在を意味しない。欧米のフェミニストは周縁の女性たちに関する知識をもっていたし、論じてもきた。しかし、それは西洋の文脈のなかで論じるためのデータ、対象にすぎず、素材を供給した女性は「ネイティブ・インフォーマント」と位置付けられた。西洋の研究者たちはネイティブ・インフォーマントから情報を得、分析的コメントを与えた。そこでは第3世界の女性の実証的役割を、先進国のフェミニスト学者は理論的・解釈的役割というヒエラルキーができあがっている。

再び第1章に戻って、現在のWomen's Studiesの状況を批判的に分析したうえでメイナードは2つの提言をする。まず、Women's Studiesを世界的な政治経済の枠組みのなかに位置付け、「女性と開発」の主題により関心を向けることである。女性への投資が「第三世界」の貧困の解決への主要な道筋であることが、公的に認められるようになり、例えば女性への教育支援が彼女たちやその子どもの健康や、人口増加の抑制のために実施されている。にもかかわらず、下層の女性に大きな打撃を与える世界銀行や国際通貨基金の構造調整政策に対するWomen's Studiesの関心は低いとメイナードは指摘する。

また、レイスは普遍的・永続的なものではなく、その社会により構築されていくことを指摘する。レイスあるいはレイシズムは、西洋社会自身のジェンダー編成を作り出し維持している。すなわち、西洋の白人女性は、「エキゾチック」な劣った他者が発見されるのと同時に、女性として、母として、労働者として、構築されてきたのである。したがって、西洋の白人女性という主体の源泉をさぐるものが決定的に重要である。これが第2の提言である。

メイナードのこれら2つの提言について、第1の「女性と開発」研究に関するものは、例えばWID (Women in Development) 概念が国際機関のリーダーシップにより「女性の自己決定」という名目の下で先進国中心的な政治経済の枠組みの保持のためにさまざまところで利用されてきた問題などを考え合わせると、やや分析が浅く感じられる。さらに言うならば、「人口増加の抑制」という先進国中心主義的な大義名分の陰で、多くの貧困な女性が自らの健康を犠牲にして、必ずしも本意でない避妊や不妊処置に協力させられていることにメイナードはどれほど自覚的であるのかははっきりしない。より大きく生かし得るのは、第2の提言であろう。この点についてはドゥ・グルートが指摘している。

ヨーロッパの、アジア、アフリカ、アメリカ、中東との出会いは、人々が物質的・文化的・政治的に支配される状況を作り出しただけでなく、西洋社会においてジェンダーに関する事柄を含めたさまざまな公平でない関係や権力構造が人種的・植民地的側面を獲得する物質的・文化的手段をも生み出

したのだ。男性性と人種的・植民地的支配の結合。女性の身分・階級・国籍・民族による分断と利用。西洋の婦人参政権運動におけるレイシズム、ナショナリズム。改めていいかえれば、西欧近代のセクシズムは、人種的・植民地的支配なくしては生み出しえなかったのかもしれない。それは、支配する側の個人のアイデンティティの内部にまで刻印を押すような執拗な支配の力であったのだろう。

このような認識を踏まえるならば、先進国において単なる“男並み平等”を求める女性運動がフェミニズムの本質からいかに離れているか、明らかになる。また、Women's Studiesへの非白人女性たちからの告発が、先進国のフェミニズムが自己の立っている足場を掘り下げ、変容していくために、いかに重要なものであるかも。

Women's Studiesは確かに編者らのいう“第3の段階”を迎えているのかもしれない。しかし、現在せまられている変容は、これまでの経験を核心から転換させる程に大きい。

この認識を経たフェミニズムは、それまでとは決定的に違っていくだろう。変容がどこまで、どのように成し遂げられていくかは未だ始まったばかりである。

2. ディアスポラとジェンダー

本書の第2部は、移住する女性のアイデンティティを論じている。ここでは、ともにイギリスを舞台にした2つの論文を評したい。

第10章のグレイは、英国在住のアイルランド系移民女性の表象をめぐる、その不可視性を浮き彫りにしてゆく。

アイルランドは、この2世紀の間、恒常的に移住が多かったが、その中でも女性の流出が目立っている。このジェンダーによる格差は、これまで「若い女性のハリウッド映画への憧れ」という心理的説明や、労働条件の悪さという経済的説明により解釈されてきた。しかしグレイは、彼女たちは経済的独立と封建的な家族主義からの解放を求めたのではないかと推察する。アイルランドでは中絶も、離婚も、さらに同性愛も禁止されているのだ。

移住する女性の多さにも関わらず、彼女たちの経験は伝えられない。一方、彼女たちに与えられたイメージは複数のレベルで「女性」化されている。まずアイルランドのナショナル・アイデンティティはイギリスによる植民地化の歴史と切り離せない。被植民者のアイデンティティが、往々にして「女性」のイメージで飾られていくように、アイルランドの共同体においても、攻撃的すなわち「男性」的な英国対受動的すなわち「女性」的なアイルランドという図式が作られた。アイルランド社会では、自国は「女性」化されて語られるのだ。移住した女性たちは、民族の再生産と文化の保持を求める社会の期待から逃走したのかもしれない。さらに、英国において、アイルランドの男性は「酒飲み、乱暴、のろま」なステレオタイプで、女性は「多産、信心深い、愚か、頑丈」なステレオタイプで語ら

れる。このように、移住女性は、移住先の英国社会からも、在英アイルランド人のコミュニティからも受容的役割を求められている。

ポストコロニアリストらによるディアスポラ論でも、男性の経験を規範化する傾向がある。しかし、雑種性を武器に国民国家を内部から侵食していこうとするディアスポラ・アイデンティティが、一枚岩で構成されることはありえない。ディアスポラは常に亀裂を起こす。

アイルランド系移民女性はどこにいるのだろうか。ナショナル・アイデンティティよりもディアスポラのもつハイブリディティ（雑種性）が彼女たちにとってより解放的だといえるのだろうか。グレイのこれらの問いに答えるには、ディアスポラ概念の新たな書き換えが必要であろう。

移民第1世代であるグレイに対して、第8章のプアーは、南アジア出身の移民第2世代である。「第1世代が生誕地にアイデンティファイするのに対して、第2世代は白／黒、南アジア／イギリス、東／西という西洋的二分法で語られる」とプアーは言う。彼女は南アジア出身のシーク教徒の家庭に生まれた第2世代の移民女性という立場から、彼女たちが英国社会のレイシズムに向き合う姿をインタビューから構成してゆく。

彼女たちがしばしば直面するステレオタイプは、セクシュアリティに絡められている。「エキゾチック」で淫らな、あるいは従順で「口説きやすい」南アジア出身女性。この圧力への抵抗の戦略は多様だが、中でもシーク教徒の民族衣装salwaar kameezesによるズラしが象徴的に描かれている。彼女たちはsalwaar kameezesを「美しく強い」イメージをこめて着ることで南アジア系女性の「汚い、下品」な、あるいは「犠牲者」のイメージを拒否する。レイシズムはコンテキストに応じて異なった形で現われることを知っている彼女たちは、イギリスの友人が彼女のsalwaar kameezes姿を見て驚いて「まるでインドの少女のようだ」と言うのを皮肉な気持ちで面白がる。自分に投げかけられている視線を熟知しているのだ。しかし、この転覆的抵抗は未だレイシズムそのものを転覆するには至らない。戦場の食事会に何気ない気持ちでsalwaar kameezesで正装していった女性は、白人の出席者から民族アイデンティティの示威と解釈されて反発を受けた記憶をもつ。ここでは彼女の意思にかかわらず、salwaar kameezesは政治的含意をもたされ、着用すら禁じられるのだ。彼女たちの抵抗は、イギリス社会にだけでなく自らの家庭やシーク教徒のコミュニティにも向けられる。その多くはシーク教を「宗教」としてではなく「伝統」として受容している。自己のアイデンティティの確認や人間関係を求めてシーク寺院に通うが、カースト制度や長髪などの教義に対しては批判を表明している。

以上がプアーによるスケッチだが、その多くが中上流階級出身であろうシーク女性たちの転覆的抵抗が、どれほど起爆力をもっているのかは判断できないし、同じ有色女性でもその階級・地位によってもっている条件は天と地ほど違うだろう。勿論、そうであるからといって彼女たちの戦略の有効性を否定することもできない。「抑圧される者」「まなざしにさらされる者」が自らの目で見返した

とき、二分法は宙に浮き、転覆が垣間見える。彼女たちはレイシズムに対する自らの無力さを転覆的に操作し、その力を最大化しようとしているのである。ここでは、その最大化が達成されるには、異なった状況をもつ女性たちとの協同が不可欠であることを言うておくにとどめたい。絶えざる転覆の先に何があるかは見えないが、転覆を行なう彼女たちのアイデンティティはその複層性ゆえにアイデンティティの固定性に断続的に亀裂を起し続ける。

結びにかえて

ひとは、ジェンダーを基盤にせずに世界を構想することができるのだろうか。あらゆる領域に潜む欲望が常にジェンダーに規範化された「性的欲望」としてのみ形をなすこの世界において、「性」を分節化していくことはあまりに遠い作業である。フェミニズムがこの30年間に社会科学に与えてきたインパクトは大きい。だがそのインパクトの内部からさらに新たな変革を求める声が打ち出されている。

抑圧を序列化せずに権力を語る。それはいつも遠回りであるかもしれない。しかし、本書がそのような過程のなかで、刺激的な一歩を踏み出したものであることは確実である。

参考文献

- ベル・フックス、『ブラック・フェミニストの主張——周縁から中心へ』、清水久美訳、劉草書房、1997年
- 江原由美子・金井淑子編、『ワードマップ フェミニズム』、新曜社、1997年
- 加藤秀一、『性現象論』、劉草書房、1998年

(きくち なつの・修士課程)